


転生したら男の娘でした

-男の娘がサキユバスのペットになる世界-





「あれ？ここは……？ていうか、声を変だな？
やけに高いというか、女の子みたいな声？」

気がつくと俺はどこか中世の神殿の様な場所に居た。
どうにか、ここに自分がいる経緯を思い出そうにも
イマイチ記憶が霞がかって思い出せない。

「まさか拉致……？いや、それなら俺みたいな
野郎でなくて、可愛い女の子が金持ちだよな」

自分で言うのも何だが見た目も凡庸。
貧乏って程でもないが金持ちとは言い難い経済状況。
正直リスクを負ってまで拉致する必要が皆無である。

うん、世の中の人間はほとんどそんなだ。
だから悲しくなんか無いぞ。ほんとだよ？

そんな事を考えていると見知らぬ女……
いや、痴女がニコニコ笑顔で向かってきた。

「ペット！？ていうか、下着！？
召喚っていったい何を言って……！？」

『うふふ、召喚は成功のようですわ。
レア度は普通みたいですが見た目も私好みですし
まあ十分許容範囲ってところかしら？
よろしくお願ひしますね。私のペットさん』



『ああ、自己紹介が遅れましたね。
私の名前はサリア。サキユバスロードです』

そうサリアと名乗った女は黒い霧の様な翼を広げる。
冗談のような光景だったが、男としての本能が
この女に捕まるのはやばいと警鐘を鳴らす。
だというのに……

『ああ、逃げようとしても無駄ですわよ？
たかだかレアクラスの男の娘が私の魅力に
抗うなんてできやしませんもの。
この場に召喚された時からあなたの命運は
私のペットとして一生生きることになったのですわ』

「う、動けない！？なんで……！？
それに召喚とかペットとかサキユバスって……
一体何を言ってるんだよ！？
そもそもペットとか言うならもっとイケメンとか
可愛い子を捕まえた方が……！」



『……？ああ、そうでしたわね。
男の方はこちらの世界に渡る際、新しい体を
手に入れるんでしたわよね。
ほら、鏡をどうぞ？』

『昔のあなたがどんなだったかは知りませんが、
今のあなたはサキュバス……すくなくとも
私にとっては大好物の容姿ですのよ？』



そうにんまりした笑顔で、魔法かなにかの力で
目の前に鏡を出現させる。

その鏡の中に写っていた自分は、かつての自分とは
似ても似つかない、華奢で小柄な女の子のような
体つきと顔をした姿になっていた。

「な、なななな!?なんだよこれ……?」

『そうですわね、かいつまんでいうと……

この世界はサキュバスに支配された世界ですよ。
この世界で男は全ての力を奪われ、
一生をそのスライムにすら勝てない脆弱な
少女の様な肉体のまま愛玩動物としてすごすのですわ』

『ま、最近のトレンドは異世界から素質のある物を召喚して
その時に授かるはずのチート能力を
エッチな方向に書き換えてペットにするというものです。
ちなみに貴方の能力は『無限射精』だけ。レア度は下から
2つめくらいですわね』

『まあとにかく、あなたはもう私に飼ってもらわうしが生きる道が
ないのですわ』



「飼うって……」

『うふふふ。そのままの意味ですよ？
私達サキュバスにとって一番のエネルギーは
殿方の精子だったり、射精する時に生み出される
快楽エネルギーなのですのよ』

『ですので、貴方はこれから
いっばいいいっばい気持ちよくなるだけで
いいのですわよー？なんにもかんがえず、
おち○ぼだけ気持ちよくなってくだされば
他には何もいらainですわ』

本能が警鐘を鳴らす。
この女の声をきくだけで、自分の中の理性が
溶けていくような恐怖を感じる。
だというのに体はひどく興奮して、まるで
その支配を歓迎するかのように期待が膨らんでいく

『ほらほら？体は正直ですわよ？
サキュバスに精を搾り取られるというのは、
隷属の契約を結ぶということなのですよ』



『おち〇ぽから、ミルクをびゅっぴゅしたら最後
一生をそのサキュバスの家畜として過ごせるよう
絶対服従の魅了状態になっちゃいますの』

『だ〜か〜ら〜
射精して人間さんやめちゃいましょうね〜？』

「ひっ、や……やだ……。そんなにやの……。
そんなにやのほああ、あひっ、ま、まって……」

心でどれだけ拒もうと、この女に見つめられるだけで
体のほてりが際限なく引き上げられていく。
気付けばへこへこと惨めな腰振り射精をおねだりする
惨めな胸をさらしてしまっていた

キッ
♡♡♡

♡♡♡
♡♡♡



キッ
♡♡♡

キッ
♡♡♡



『ほらほら？体は正直ですよ～？
それとも～あらあら、そうだったんですわね。
隷属の契約をするまえから、射精の許可を私に
直接もらいたかったんですわね～？
うふふふ、仕方ない子ですわね』

「ま、まって！？
や、やだ……そんな今命令されたら……
簡単に……！！」

『さて、じゃあ行きましょうか』

「へ？いくって何処に？」

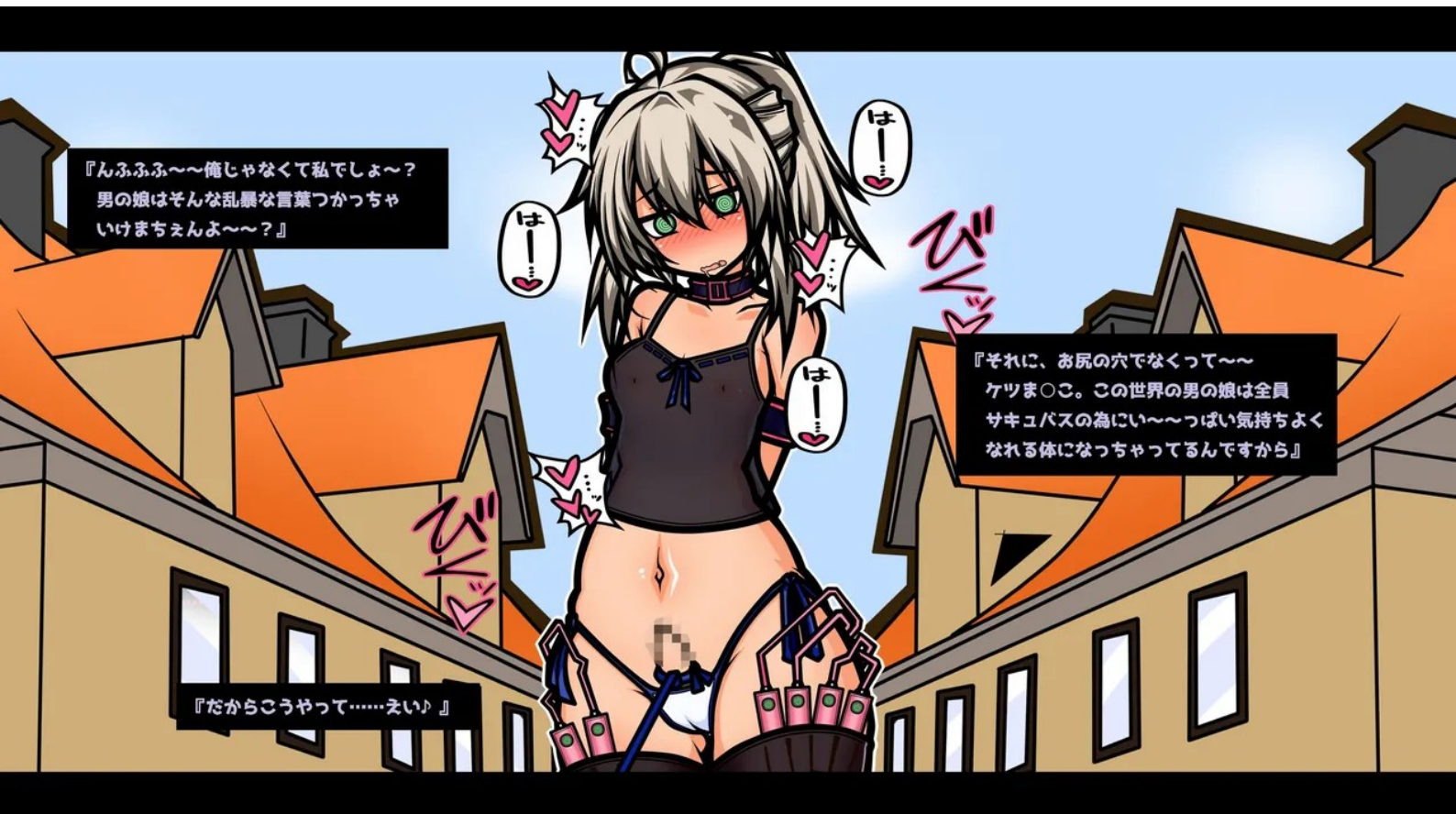
『決まってるじゃない？お外だよ』

『ほらほら、早く歩かないと皆に
けつマ○ゴにいっぱいローター詰められて
おち○ほにリードつけられて散歩して
アへってるところ見られちゃいますよ～？
それとも、見られたいんですかあ？ふふふ』

「そ、そんなこと言っただって……あ、おひ！？
ほひい、おしりの穴の中でフルフルして
んおおおお……」

「や、やだああ。俺のお尻の穴どうなって……
おほおおおあ！？」





『んふふふ～俺じゃなくて私でしょ～？
男の娘はそんな乱暴な言葉つかっちゃ
いけまぢえんよ～～？』

はー！
はー！
はー！
はー！

『それに、お尻の穴でなくって～
ケツま〇こ。この世界の男の娘は全員
サキユバスの為にい～っばい気持ちよく
なれる体になっちゃってるんですから』

『だからこうやって……えい♪』



「あひいいい!! おほおおお!?
や、やあああああ、ち○ぽ引ッ張られただけで
気持ち良くなって!? んひいいい」

あひいいい!!

あひいいい!!

「や、やめ……! おひいいい!?
やだいっちゃう……! こんな街の中で
ち○ぽ引ッ張られただけでイケのやあああ」

『んふふ、だったら～ちゃあんと歩きましょうね～
ケツま○こにローターぎぢぢに詰められて
おち○ぽリードで引ッ張られながら自分が
惨めなペットになっちゃったこと知りましょうか』

あひいいい!!

『ほらほら、いちにーいちにー。
おち○ぽふりふりあるきましょ——わっ』
びいん

「あひっ!!？」

そう言うと不意にち○ぽを引っ張るリードが張り詰める。
その衝撃に羞恥心やお尻の穴からくる快楽で
トロケきっていたち○ぽは抵抗などできなかった

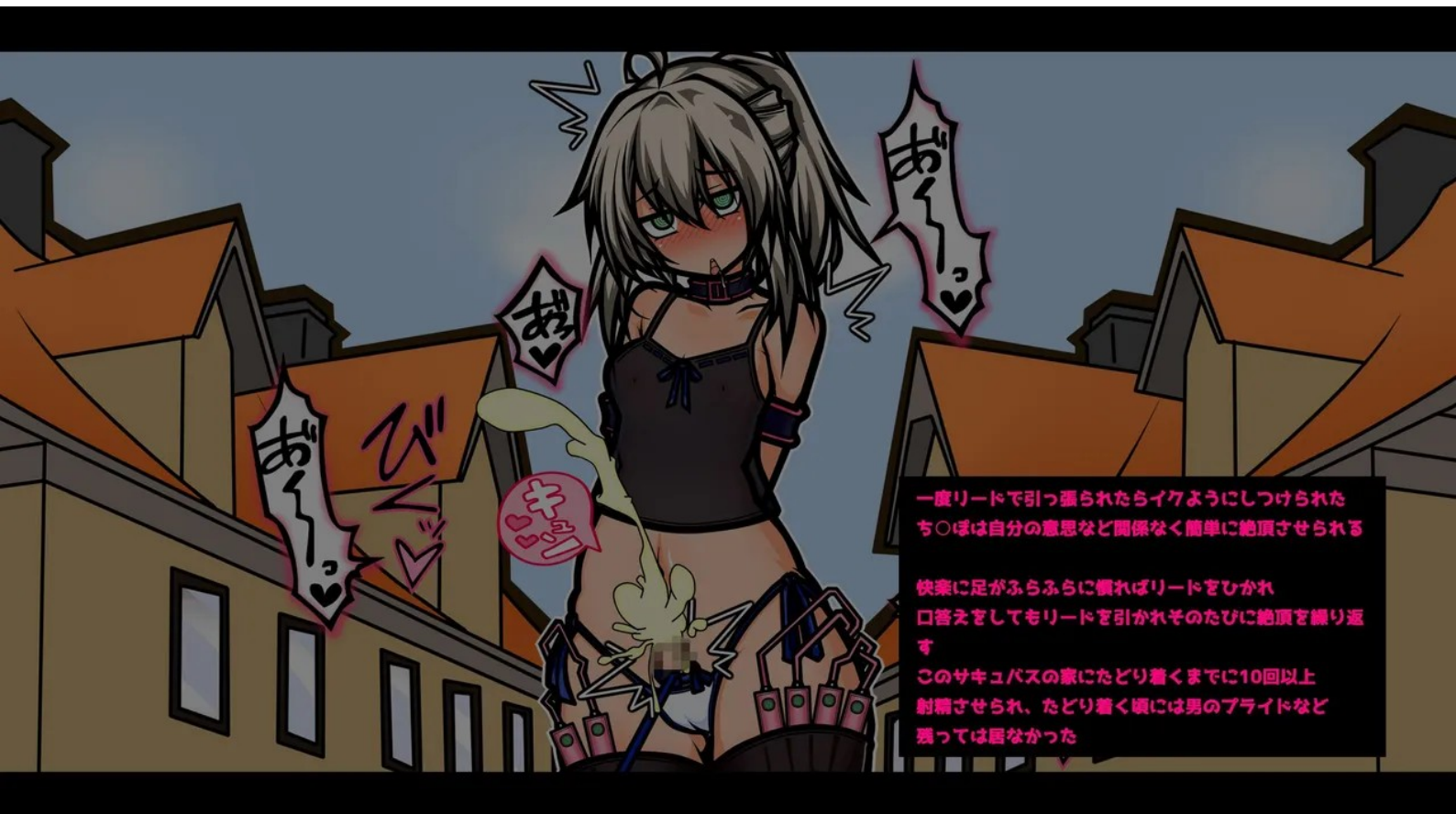


『あらあら～？我儘したのにイッちゃったんですかあ？
だめな子でちゅねえ？でもいいですよおお？
この世界の男の娘はそういう、おち○ほすら
自分で管理できない飼ってもらったために生きてる
惨めな愛玩動物なんですからあ』



『だから、い～～っばいおち○ほ気もよくなっちゃって
くれていいですよおお？何もかも忘れて
惨めなペットさんになっちゃいましょうね？』

「ぞ、そんな……そんなの……
俺は……人間で……こんなの……こんな」



一度リードで引っ張られたらイクようにしつけられた
ち○ぽは自分の意思など関係なく簡単に絶頂させられる

快楽に足がふらふらに慣ればリードをひかれ
口答えをしてもリードを引かれそのたびに絶頂を繰り返す

このサキュバスの家にたどり着くまでに10回以上
射精させられ、たどり着く頃には男のプライドなど
残っては居なかった

あの日、あのサキュバスの家に連れて行かれてから
俺の生活は一変した。

「きよ、今日は何をするんだよ……？」



毎日、変態チックな衣装を着せられては、
ち○ぽや尻の穴を徹底的に弄られ、絶頂させられる。
流石、淫魔というだけはある、そのテクニックには
この敏感な体では太刀打ちできない。

結果、俺は毎日のようにこいつの前で醜態を晒していた

『ふふふ～大丈夫ですよ？怯えてるのに、
精一杯強気に振る舞わなくっても～？』

『本当は自分がどんなひどい目にあって
アハアハイキ狂わせるか怯えながら期待してるのに
元の世界での男として生きた記憶が
邪魔しちゃうんですよね～？』

キッ！
キッ！
キッ！

はー…♡

はー…♡

キッ！
キッ！
キッ！

キッ！
キッ！
キッ！

キッ！
♡♡♡

はー…♡

はー…♡

キッ！
♡♡♡

『そういうところも意地らしくて可愛いんですが
そろそろ慣れて貰おうかなと思ったわけですよ』

『と、いうわけで～』

『じゃ〜ん♪ これが見えますか?』

『これはですね〜? しつけのなっていない男の娘向けの
調教用アナルスティックってものなんですよ〜?』



『いろいろな形をしてるこのスティックで男の娘の
ケツま〇こをグチュグチュ〜って弄ってあげると
あっというまに、ケツま〇こをトロットロにトロケさせて
よがり狂っちゃうスグレモノなんですよ〜?』



「ま、まって……まさかソレで……」

『はい、もちろんそうですよ～？
キミのケツま〇こはこれから、コレをつかって
くっちゃくちやのトロット口になるまで
ほじくりかえされちゃいま～す』

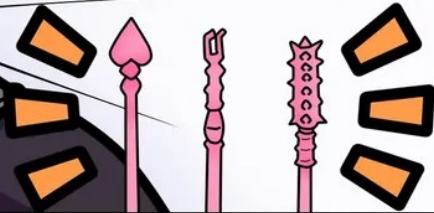
キョー
キョー
キョー

「や、やあああ～」

身をよじって逃げようとするも男の娘のちからでは
軽く足を体重をかけて抑えつけられただけで
動くことができなくなってしまう。
俺はただ自分のお尻のアナをこのサキュバスの前に
無防備に晒すしかなかった。

キョー

キョー



『だめですよあ？今日はキミが自分から私の淫乱ケツま〇こをグチュグチュしてください～っておねだり出来るようになるまで許して上げませんから』

『いろいろ種類がありますから～ぜーんぶ試してどれが一番気持ちよかったか教えてくださいね？』

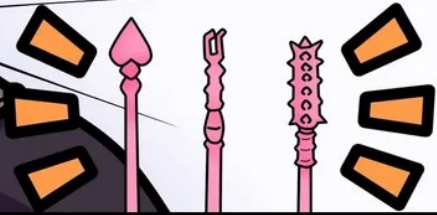
キツキツ♡♡♡

「そ、そんなおねだりなんか言えるわけ……や、たしゆけ……たしゆけてえええええ」

キツキツ♡♡♡

キツキツ♡♡♡

キツキツ♡♡♡

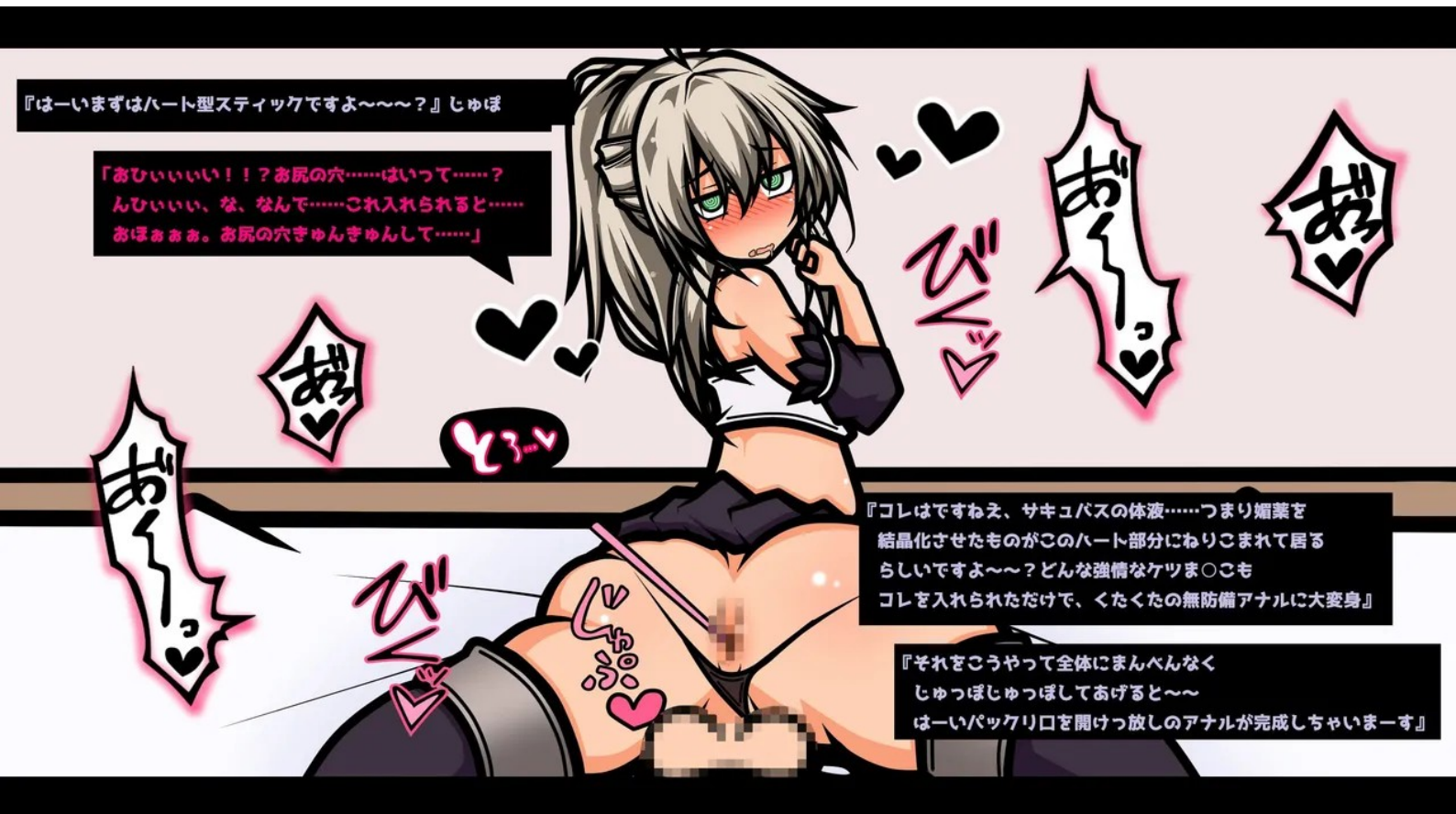


『はいまずはハート型スティックですよ〜〜?』じゅぽ

「おひいいい!!?お尻の穴……はいつて……?
んひいいい、な、なんで……これ入れられると……
おほああ。お尻の穴きゅんきゅんして……」

『これはですねえ、サキュバスの体液……つまり娼業を
結晶化させたものがこのハート部分にわりこまれて居る
らしいですよ〜?どんな強情なケツま〇こも
コレを入れられただけで、くたくたの無防備アナルに大変身』

『それをこうやって全体にまんべんなく
じゅっぽじゅっぽしてあげると〜
はいパツクリ口を開けっ放しのアナルが完成しちゃいまーす』



『そこに~~~~えい』じゅぽぽ

「ひえ……?おびよおおお!!?」

『メロメロになっちゃったトロトロおなるに凶悪なケツ肉を一粒一粒
ひっかいて虐めるような極悪スティックを投入しちゃいまーす
すごいでしょお?男の娘がどうやったって気持ち良くなっちゃうように
計算されて作られたスティックが』

『娯業で油断しきっちゃったアナルに
二本も一気にぶちこまれちゃってますよ〜?』



『キミはこれでこれから一日中
ケツま〇こをほしくり返されちゃうんですよ
どんだけ泣いたって、おしりの穴が落ちて
敗北宣言しても許してもらえないし
男の娘の非力な力じゃ逃げることもできない』



『た〜っぶり時間もありませんから
男の娘がどういう存在か理解していってくださいね』

「ま、まって、やっやらあああ！！
ペットでいいでしゅから、そんなひどいこと
やっ！！クチュクチュしないで！？
おほっ！おほおおおおおおお」

おほお

おほお

♡♡

ムンムン

ムンムン

おほお



おほお

とろっ

おほお



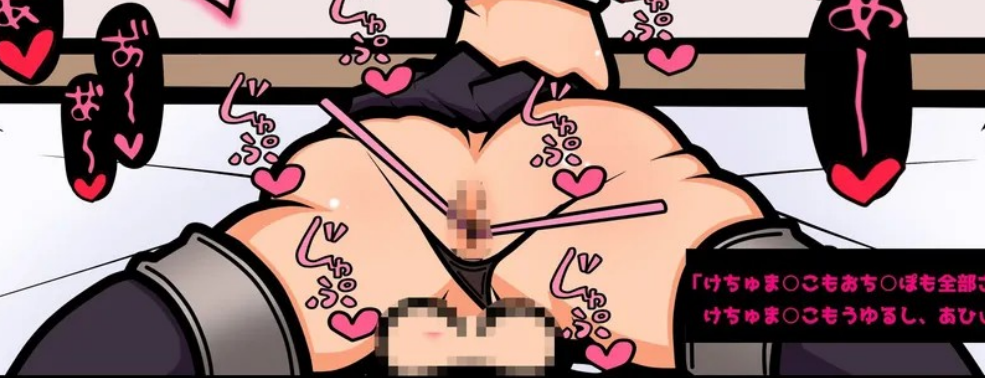
7時間後

「あひつ……はひいいい……
もうくちゅくちゅしにやいでええ……
落ちてりゅう、私のケツま〇こ完全屈服してりゅかりや
ケツま〇こやしゅませてえええ」



「おほっ！おほおおおお……！
もうどごグチュグチュされても気持ちいいにょおお
あち〇ほもケツま〇こモイキすぎて訳わからなくなってるかりや」

「はむいいい。私がまちがってましたああ
男の娘はサキュバス様の慈悲で快楽を与えてもらうだけの
エッチなペットでしゅううう」



「けちゅま〇こもおち〇ぼも全部さすげましゅかりゃあああ
けちゅま〇こもうゆるし、あむいいいいい」

「はむいいい。私がまちがってましたああ
男の娘はサキュバス様の慈悲で快楽を与えてもらうだけの
エッチなペットでしゅううう」



「けちゅま〇こもおち〇ぼも全部さすげましゅかりゃあああ
けちゅま〇こもうゆるし、あむいいいいい」

その後数時間に渡って私のケツま〇こは責め続けられました。
日が暮れる頃には、何処がどれだけ感じるか
自分以上に自分のケツま〇このことを調べつくされ
今後の調教に役立てられるそうです





「はあああ……はあああ…」

今日はサリアが私を置いて出かける日だ。
そんな日は賣められることもなく悠々自適の
休日となる……わけではない。



「ふふっ!!?ふふうううう!!」
(ま、またきた!?おむいいい、やめ……
これ以上、私のケツま〇こかき回さないでよああ
こんにゃのすぐ、おほあああ)

はー!♡

はー!♡

はー!♡

はー!♡

あのサキュバスが外出してる間、
私のケツま〇こには、極木のパイプが押し込まれ
体を完全に拘束され放置されることになる
敏感すぎる体は、回転やピストンで的確に
私の弱点を攻め立てるパイプに計う筈もないのだけど

「ふふううう!!おふっ!おふふうううう」
(ほひっ、イグ!こんなのがイケちゃうのにいい
まって!止まらないでええええ、
お尻の穴生贖しにされて、やだ!やだよおお!
いかせてええええええええ!!)

はー!
♡

はー!
♡

ウウウウウウ

はー!
♡

はー!
♡

せっきくの精液や絶頂エネルギーを主が居ない間に
発散させてしまうなんてもってのほかである。

パイプには当然のように絶頂前で動きを停止する
機能を取り付けられ、あと1秒でも振動してくれば
絶頂出来るというところでいつも止められてしまう



「ふううう!!ふひつ、ふひいい」
(イキたいよあああ、イキたいのに……
いかせてくれないなんて、つらすぎるよああ)

(射精……！射精……！射精させてええええ！
なんでもしゅるかりやああ！！射精させてええええ！)

もうそこに男だった頃の尊厳は何も残っていない。
いつ帰ってくるとも知らない主に、絶頂を切望し
無様に腰をかかか振って少しでも快楽を得ようとする
活ましいペットの姿しかなかった。

G...I...T...

(そんなの最低なのに……
こんな無様な存在になるなんて嫌なのにいい
なんでこんなに気持ちいいんだよぉ!!)

射精したい。でもそんな状態で我慢し続けた自分を
セリア様に褒めてもらいたい。それでいっぱい
主の為に射精したい。
ペットとしての自覚が自分の中に確立されていくのを
恐怖しながらも喜んでしまう自分がいる。

そんな心境の変化を感じたのかパイアは今までにない
攻め方に移行した。

「んふ！？ふうううう……あふううう」
(な、なにこれ……？今までみたいな急に動き出して
絶頂付近まで一気に押し上げられて放置されるんじゃなく
ずっと、ゆるく振動してる？)

ウウウウウ

ウウウウウ

今までの動きとは違うゆるい貴に困惑しつつ
この程度なら耐えられるという感想を抱く。
だが淫魔の玩具がそんな甘いはずもなかった

2時間後

「ふうふうふう。ふうふうふうふうふう」

(けちゆうう……けちゆま〇こがあああ。
あほああああああああああああああ)

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

う
う
う

う
う
う

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ



甘い振動は決して絶頂に至れないゆるい責であり
今までのような断続的な責でなく常に甘い快楽を
ケツま〇こに与えつづけてくる。

2時間ものあいだ、その甘い刺激にさらされた
けつま〇こはトロトロに熱れきっており、
頭の方もまともな思考ができないほどトロけさせられていた

あぁあ

あ〜♡

あぁあ

ウウウウウ

ウウウウウ

あぁあ

あ〜♡

あぁあ

あ〜♡

「んほっ！んほおおおおお」

(おしりきもちいいい……おち○ぽイケにゃいのに
お尻の穴だけでこんなに気持ちいいなんてへえええ)

(たしゅけ……もう、もどれなくなっちゃう……
これ以上お尻の穴の気持ちよさしつたりゃああ
でも、でもあああ！おほおおおおおおお)

その脳を溶かすような快楽に恐怖しながらも
快楽に流されていく。それがたまたまなく背徳的で
その事実が快楽を限りなく加速させていく

『ただいま戻りましたよ～？
ちゃんとい子にお留守番できてました？』

『って。あらあら？射精したさに
すごいことになっちゃってる見たいですねえ？』

甘いパイアの振動で熱れきってぐちゃぐちゃになった
尻穴と涙やよだれでベタベタの顔を見て面白そうに
サリアは笑う。

「おはっ……！お願いします！
射精させてくだひゃいいい……！
もうケツま○ごもあち○ぼも限界で……
射精っ……射精いいいいい」


い
ゅ
ぶ
ぶ
♡

ん
ん
ん
ん
ん

『うふふ、さんざん焦らしてあげた効果は
ばっちしみたいですねえ？でも、このまま
素直に射精させてあげても芸がありませんし……
そうだ……！』

「へ？おほおほおほおほ！？」





『ふふふ、どうですか〜？サキュバスの
肉厚ぷりぷりあっぱいのパイズリですよ？
ちょうど外出して汗ばんでいますから、
天然媚薬ローションでにゆるにゆるで気持ちいいでしょう？』

『まだ挿んだばかりなのに、もうイキそうになっちゃって
そんなことじゃ、おちんぼの本来の使い方なんて
到底出来なさそうでちゅねえ？』

「そんな……！そんなことは……おひいいい」

『あらあら？口答えでちゅかあ？いけませんねえ
でも、そこまで言うんでしたら一つ賭けをしてみましょう
もし私の胸の中でおち○ぽを射精せず3分間耐えられたら
私のサキュバスおま○こに挿れさせてあげましょう』

い
ぢゅ
ぽ
ぽ
♡

ズ
ズ
ズ
ズ
ズ

『してます？サキュバスのおま○こは
男の娘のおちんぽを気持ち良くするための快楽機関で
と~~~~つても気持ちいいんですよおお？』



「おま○こ……。せつくす……」

私の中に微かに強った男としての尊敬が
その言葉に刺激される。

い
ぢ
ゅ
ぶ
ぶ
♡

ん
ん
ん
ん
ん

『そのかわり……もし、たった3分も射精が我慢できなかつたら
そんな役立たずのおち○ほは二度とおま○こに挿れる事が
できなくなっちゃう呪いをかけちゃいましょうね?』

「そんな……まって!? おひょおおおおお」

『はい、スタート～。キミのグソザコおち○ぼちゃん
私のおっぱいの中でびっくんびっくん跳ね回ってますよ。
でも、そんなことしても、短小おち○ぼじゃ逃げ場なんて
無いんですけどね～～?』

『ほらほら、がんばれがんばれ～～

こんなことじゃ永遠に童貞さん待ったなしですよ?
いいんですか? セックスの権利を剥奪された男の娘は
私達のペット(男の娘)を持ち寄った集まりでも、
遊びでケツま○こに挿付されるメス犬扱い
待ったなしなんですからね?』



「や、やだ……！そんなの……！そんなのおおお」

『うふふ、あらあら……想像して興奮しちゃったんでちゅか？
逆効果だったみたいでちゅねえ？そんなトMな男の娘なら
もうセックスなんて出来なくても問題ありませんね』

『ほらほら、もうイッちゃっていいですよお？
男として完全に終わる事を引き換えにした最高に気持ちいい
絶頂きめちゃいましょうねえ？それぞれそれ～』



「やあ！いやあああ！まって……！たしゆけ！
終わる……！おわっちゃうううう！！私、わたしいい！」

「んほおおおお！！いつてりゅうう！！
おち○ぼミルグどびゅどびゅでりゅうううう！！
おほっ！おほおおおお！！
もう絶対セックスできなくなっちゃうのにいい
んほおおおおおおおおおお！！！！」



『いっぱいでしたわえ？でもまだ奥の方に残ってるみたいだし
吸い出してあげますからねえ』じゅぶ

「あほ！？わ、私のおち○ぼたべ……！あひいいい！
すわれ……すわれりゅうう！！？
ケン○マの中のち○ぼミルクすわれむえ！！？によほおおあ」

「もうでにゃい！でにゃいかりゃああ！！？あひいいい！！
おち○ぼお口のなかでとけりゅうう！！ほひ！
ずっと射齧してるみたいであひっ！！たしゅけええええええ」



このあと私のおち〇ぼはサリア様にキン〇マが空っぽになるまで
服い出され、その長過ぎる射撃が終わる頃には、
かすかに残ってた男としての尊厳はもとより、男の娘としての
プライドまでも服い出され、完全に一匹のメスに変えられて
していました



この世界に召喚されてからどれだけの日がたっただろうか。

『ほら、ちゃんと他の飼い主様にご挨拶しなさい?』



【あらあら、サリアったら酷いわねえ、男の娘に
一度も女の子の中の気持ちよさを教えてあげること無く
セックス禁止の呪いをかけちゃうなんて】

【まあ、貴方は射精させるのが好きなようだし、
私みたいに男の娘には似つかわしくない巨根に仕上げて
おまんこで楽しむタイプでも無いんでしょうけど?】



『あら～? 私だってサキュバスですもの。おまんこで楽しむ
趣味くらいは持ち合わせてますよ? でも、この子の場合
そんなちょっとした男としてのプライドもゼーんぶなくして
男の娘のコーストでも最低辺に落として可愛がって
あげたかっただけですよあ?』

【貴方らしいわねえ。だったらうちの子、少し使ってみる?
なかなか具合いいわよ?】

いいわね。そんな軽いノリで、サリア様と親しげに会話していた
サキュバスの運れた男の娘を押し倒し、
かつて自分が持っていたものよりも遥かに巨大なち○ぽを
そのおま○こで飲み込んでいく。



『うふふ。物欲しそうな顔してもだめよお？
貴方はもうおま○こにおち○ぽを挿れることなんて
一生できないんですもの。それもあの時少しでも
射精を耐えられていたら、違ったんでしょうけどね』



『待て、よ。貴方は私とこの子のセックスを、
そのちっちゃいおち○ぽおっ勃てて見ていなさい？』



「そ、そんな……こんなの……あひいい」

周囲から漂ってくる甘い香りさかくと同時に
頭の中がチカチカと明滅する。



(にゃ、にゃんで……!?この匂いを嗅いでると脳が……
麻みぞとろける……!?おほあああ)

『すごいでしょ?サキュバスがペットを持ち合っ
たパーティだもの。当然やることは決まってるわよねえ?』

周囲を見ても、男の娘のち○ぽをフェラやおま○こで楽しむサキュバスの姿。男の娘同士にセックスをさせてそれをあかずに楽しんでいるサキュバス、ふたなりになって男の娘を犯しているサキュバス、中にはサキュバス同士で楽しんでいるものまでいる。



『サキュバスの体液は、とーっても強い媚薬なのはしってるでしょ？
それが、この部屋いっぱいにはり込んでるんですもの
もう匂いだけでイケちゃいそうですわよねえ』

「あひっ？あへえ？？ら、らめ……
こんな匂い強すぎて、頭が……ばーになりゅう
イキたい……！イキたいのに……からだがある」



『うふふ、あん。たしかにこの匂い、サキユバスの私でも
きつく感じるほどですもの。このこったら、私の中で
さっきからイキっぱなしですよおお？』

「しよんにゃ、ずるい……！わたしも……
私もせっくしゅううう、せっくしゅしたいのにいいい」

『あらあら、本当に仕方のないペットですわね？
そんなにセックスしたいならさせてあげたいのは
やまやまですが……』



『もう二度とセックスできない呪いがかかっているんですもの
キミは、そこおとなしく私達のおま○こハメハメを見て
射精してくださいね？
あふ、気持ちいい、良いわねえ今度、ちゃんとおち○ほの
使える男の娘買ってこようかしら』



その後、サリア様は新しい子を買ってくるなんて臆だよと抱いて慰めてくれました。

蒸れたサキユバスの体臭で脳みそをトロケさせた私はその胸の中で10回以上も射精を繰り返し改めて永久に隷属すると誓うのです。めでたしめでたし……？